

【協働の輪を広げる、地域に根差した活動】

JA宮崎県女性組織協議会（宮崎市）

代表者：会長 川上 典子
結 成：昭和31年（活動歴69年）

1 概要

女性の社会的・経済的地位の向上を図り、明るい地域づくりを目指して発足。地域住民を対象に、食農教育や地域の暮らしを支える活動など、地域に根差した活動を展開。本協議会は、県全体を総括し、安心して暮らせる地域づくりに貢献している。



高齢者への弁当配達、
訪問活動



地元農畜産物を
活用した料理教室

2 活動のポイント

○先進性・独自性

農村女性の知恵や技を次世代に伝える郷土料理集の制作やおすすめの観光スポットを紹介するマップ制作など、食文化の継承と地域の魅力を再発見し発信する取組を行っている。

○継続性

長年にわたり、地域の農畜産物の魅力発信、子ども向けの食農・食育活動のほか、地域の高齢者支援や次世代の活動を担う若者の育成に継続的に取り組んでいる。こうした地道な活動の積み重ねにより、令和8年度には会の発足から70周年という節目を迎える。

○発展性

毎年、全世代の地域住民及び部員を対象に、協働の理念を学ぶ「JA女性大学」を開催している。活動の仲間づくりを進めるため、若い世代を積極的に取り込む工夫を重ねており、参加者数は増加傾向にある。さらに、県内研修にとどまらず、全国各地の先進的な取組を学び、その成果を県内での活動に還元している。

○自主性

本会は、営利活動を行うJA本体とは異なる任意団体として、JA組合員に限定せず、広く地域住民を対象に活動している。活動費は、部員からの会費及びJAが社会貢献の一環として拠出する助成金により賄われ、自立した運営体制を維持している。設立当初の思いを受け継ぎながら、現在は地域とのつながりを重視した多様な活動を展開している。

○協働性・連携性

小学校や地域の祭りにおいて、地元農畜産物を活用した料理教室を実施し、地域住民との交流を促進している。また、行政や社会福祉協議会と連携し、高齢者向けの手作り品のふるまいや憩いの場の提供、弁当配達や安否確認のための訪問活動を行い、安心して暮らせる地域づくりに貢献している。

○効果

長年にわたって県内各地域に根差した多様な活動を続けてきた結果、現在では地域に欠かせない存在として、住民のつながりを強化するとともに、世代を超えた交流を通じて各地域の活力創出に寄与している。

3 その他

組織規模：県内13地区を総括（総部員数：約8,800名）

●おもとのつどい（対象者：65歳以上の部員）…1会場・731名/年

●地域の暮らしを支える活動…25会場・10,042名/年 ●JA女性大学…1,697名/年

●消費者交流活動…25会場・8,033名/年 ●子ども向け食育活動…19会場・409名/年

【命を守る結束力が生む、地域の絆と賑わい】

清正区自主防災会（日向市）

代表者：会長 甲斐 希貴
結成：平成12年（活動歴25年）

1 概要

清正区は、日向市細島にある人口約550人の沿岸地区。東日本大震災をきっかけに住民の危機意識が高まり、住民自らが土地の取得・造成を行い、「防災広場」を整備。このプロセスを通じて生まれた結束力を土台に「命を守る地域づくり」を実践している。



区で整備した
防災広場



清正区自主防災会主催の
避難訓練

2 活動のポイント

○先進性・独自性

住民が安心して避難できる環境が未整備であったため、自主防災会でプロジェクトチームを結成。避難場所となる防災広場の土地を取得し、有志で造成を行うとともに、行政や民間企業と連携しながら避難経路の整備を進めてきた。地区が主体となって、地域の防災力向上に取り組む本活動は、命を守る地域づくりに寄与する先進的な取り組みである。

○継続性

平成12年の発足以降、避難場所の整備と併せて、継続的に避難訓練を実施している。活動に取り組む姿が地区住民に伝わることにより理解が深まり、参加・協力する住民が増えるなど、活動の輪が着実に広がっている。

○発展性

自主防災会の活動は、防災をきっかけに地区住民が地域の実情を再確認し、危機意識を共有することから始まっている。その上で、課題解決に向けて行政や民間企業などを巻き込んだ防災活動を展開している。また、避難場所や経路を周知するため、子ども向けの防災ピクニックや親子防災遠足などのイベントを実施し、幅広い世代の参加を促すなど、活動の裾野を広げる工夫を重ねている。

○自主性

地区住民や有志からの協力・寄付により、避難場所の倉庫や防災備品の確保に努めている。さらに、避難が長時間にわたることも想定し、防災広場の電気や水道、トイレ、転落防止柵等のインフラ整備を市や関係団体と連携して自主的に整備している。

○協働性・連携性

避難訓練のほかにも防災の専門家と連携した講座や避難時の炊き出し・テント張り訓練を実施するなど、自治会をはじめ、民間企業、消防団、学校などの多様な主体と連携した活動を展開している。

○効果

整備された広場は避難場所としての機能に加え、花火大会などの地域のイベントでも活用されており、住民の憩いと交流の拠点となっている。こうした取組を通じて、自助・共助による地域防災力の強化や住民の防災意識の向上が図られたほか、「防災」を軸とした活動が若者や地域外の人々の参画を生み、地域コミュニティの活性化と活力ある地域づくりに貢献している。

3 その他

- 避難訓練の参加者・・・R4：90名 R5：99名 R6：100名 R7：87名（※R7は夜間）
- 地区主導での高い意識が評価され、（一社）みやざき公共・協働研究会の「防災モデル地区」の指定を受け、専門家の支援を受けながら活動の質を高めている。

【廃校を希望の灯火へ 住民で紡ぐ安心の拠点づくり】

ぎおんの里づくり協議会（五ヶ瀬町）

代表者：会長 白瀧 徹哉
結成：令和3年（活動歴4年）

1 概要

鞍岡中学校の閉校を契機に、地域の衰退に危機感を抱いた住民が立ち上がり、集落を広域的に支え合う体制づくりを目的に設立。廃校舎を拠点に、コミュニティ食堂や高齢者の居場所づくり、買い物支援に取り組み、「小さな拠点」として、安心して暮らせる持続可能な地域づくりに貢献している。



高齢者向けの
コミュニティ食堂



くららマルシェ
（買い物支援）

2 活動のポイント

○先進性・独自性

設立にあたり、1年をかけて地域の現状や課題を洗い出し、将来を見据えて取り組むべきことを地区全体で考え、行動計画を策定。「みんなが元気で住み続けたい鞍岡づくり」を目標に、協議会を中心として地区が一体となって、廃校を「地域の生活拠点」として再生させ、集落の維持に取り組む先進的な事例である。

○継続性

5年目を迎えた現在、定期的にマルシェやコミュニティ食堂、季節に応じた催しなどの各種活動を行っている。毎月発行している“かわらばん”で今後の計画や活動の様子を発信することにより、活動内容の認知度が向上し、参加者の定着・拡大につながっている。

○発展性

既存の取組に加え、農福連携にも着手するなど、先進地の視察も行いながら活動内容の充実を図っている。また、視察先で学んだことを地区住民に還元する講習会を開催したり、高齢者と子どもが共に活動できる機会を設けたりするなど、多世代が支え合う仕組みづくりを行っている。

○自主性

施設の指定管理を協議会が担っており、その指定管理料や施設利用収入に加え、ふるさと納税返礼品の製造作業委託や野菜・薪等の販売による自主財源の確保に取り組み、補助金に依存しすぎない「稼ぐ地域づくり」を実践している。なお、協議会の活動方針は、事務局や役員を中心に話し合い、総会を経て決定するなど、住民主体の運営を徹底している。

○協働性・連携性

子どもと高齢者向けのコミュニティ食堂において、余剰食材と地元食材を活用した食事を提供し、地区住民の交流の場の創出や孤食対策に取り組み、地域の賑わいづくりに貢献している。なお、協議会事務局には、町の集落支援員を配置しており、行政や社会福祉協議会、地元の地域づくり団体等とスムーズに連携できる体制を整えている。

○効果

買い物支援やコミュニティ食堂など、住民の生活に欠かせない取組を行うとともに、協議会が鞍岡地区の核となり、住民同士をつなぐ役割を果たしている。

3 その他

【主な活動内容】協議会会員：55名

- コミュニティ食堂…子ども向け（8回/年、約30人/1回）・高齢者向け（12回/年、約30人/1回）
- マルシェ（買い物支援）…毎週月・水曜日
- 生ゴミ堆肥づくり…毎週木曜日
- カフェ…毎月1回 等